

(史料) リシャール・シモン『旧約聖書の批判的歴史』の異本文について (第一回)

高 橋 薫

オラトリオ会のリシャール・シモン¹⁾が1678年に『旧約聖書の批判的歴史』²⁾を刊行するやいなや、直ちにベニーニュ・ボシュエの逆鱗に触れ、発行禁止処分の対象となり、以後、1680年と1681年に刊行された海賊版³⁾のあまりの杜撰さに業を煮やしたシモン自身が、出版地を国外に求め、1685年自らの監修による新訂版を出版したのは、聖書批判史家のみならず、わたしのような思想史の辺境をさまよう極楽蜻蛉にとっても、よく知られた史的事実だが、一方1678年の初版と1685年の新版との関係が、シモン研究史の流れを汲んで、伊藤玄吾氏⁴⁾の「〔初版を〕忠実に復元したとされる」〔342〕の「される」という発言の根拠については、1678年版の校訂本がいまもって刊行されていない現状では、確認の仕様がなない。そこで本中央大学で2015年度の「特別研究」を許された期間のうちに調べられた範囲で、「復元したとされる」の推定部分・伝承部分がどの程度事実⁵⁾に即しているか、確認した結果をご報告する。したがって本稿は2015年度特別研究の成果の一部である。

*

さて本稿で底とする版だが、BNFの1678年版の電子テキストの状態

が想像を絶して悪く、あまつさえ欠落したページもあるため、残念ながら信頼すべき底本とはしえない（BNF で一度電子テキスト化されたものを再度改訂してもらうことがどれほど不可能事か、利用された方ならお分かりいただけると思う）。また伊藤氏のいう、ピエール・ジベールの「詳細な注の付された新しいエディション」も標題に『リシャール・シモン著「旧約聖書の批判的歴史」（1678）』と謳いながら、その実ジベールも認めているように 1685 年版のエディション・クリティック（後述するように、厳密な意味では、残念ながらエディション・クリティックの役を果たしていない）に過ぎないのであるから、これも異本文の検討の底とは認めがたい。したがって暫定的に初版の電子テキスト版、初版を「忠実に復元したとされる」1685 年版のファクシミリ版、および初版電子テキストの欠落ページについては 1680 年海賊版（手元にあるものが、三種類発行されたという海賊版のどれにあたるか、残念ながら同定できなかった）、1681 年海賊版の BNF 電子テキストで補い、異本文を精査した。その結果 1678 年版（以下「78 年版」と略記）と 1685 年版（同様に「85 年版」と略記）のあいだに、幾つかの位相で異同があることが判明したので、ここに報告する。

- (1) 誤記の訂正) 78 年版 [421] qu'insi→85 年版 [341(d)] qu'ainsi、等。これは極めてまれな例外であって、78 年版出版当初から、シモンの配慮が並々ならぬものであったことをうかがわせる。その他の誤記の訂正、または版を改めたために生じたと思われる誤記については、節を改めて表すものとする。
- (2) 略語の回復) 端的に言って、78 年版 V(v). → 85 年版 Verset、および 78 年版 (80～81 年版) S. → 85 年版 Saint その他である。各所。
- (3) 綴りの修正 1) 単語の綴りが統一されていないこの時代、ひとつ

ひとつを例示するのは無謀なので控えさせていただいた。78年版 temps → 85年版 tems (各所) 同 esté → été (各所)、その他、などは比較的 (特に後者についてはあくまでも比較的) 体系的に採用されている異綴であるが、こうしたものをそれぞれ取りあげるには、それぞれ大手の出版社と大規模な調査員の投入が必要となるであろう。ここでは省略させていただく所以である。

- (4) 綴りの修正 2) 語頭の大文字と小文字の変換。これは78年版、85年版相互に生じ、あまりにも多数に及ぶので、特別な場合をのぞいて言及する必要は無いと判断した。下記(6)参照。
- (5) 綴りの修正 3) これは人名だが Valton (78年版) → Walton (85年版) に統一して改めた例が、この人物名にかんしてだけ存在した。各所。また78年版 phantaisie → 85年版 fantaisie に訂正した例も一件存在する。85年版 p. 89(g). 理由はよく分らない。また78年版 Membres → 85年版 Jambres の誤った修正もある。85年版 p. 51(g). おそらく後出 p. 7 の誤記・誤植の発生に移すべきであろう。
- (6) 綴りの修正 4) 例として、etymologie d'Isidore (78年版) → Etymologie d'Isidore (85年版) 等。例示した変更は etymologie が普通名詞ではなく、固有名詞としてイシドルスの著書であることを明記するための変更であるが、この普通名詞→固有名詞の変更にとどまらず、おそらく強調のために大文字を使用したり、その強調をほどいたりするための変更は各所に見られる。また後述するように、78年版で長文を区切るために (:) ないし (;) を用いた後半の文章の書き出しが大文字であったものを、85年版で小文字に変更した例も見られる。Passim.
- (7) 綴りの修正 5) これも多々存在するが、78年版で個々の単語から成立していた熟語表現を、85年版ではハイフンで結び、一語とした

ものである。c'est à dire → c'est-à-dire. なおこの例は現代の単語に繋がるが、そうでない場合もある。de plus → de-plus 等。78年版で現代と同じ単語が用いられているのに、85年版でわざわざハイフンを入れた例もある。例えば *ensuite* → *en-suite*. この種の綴りはページをめくると、各ページに幾度となく見られるであろう。

- (8) 綴りの修正 6) 78年版での算用数字の使用を85年版でローマ数字に改めた例。各所(特に第三卷第二十四章以降 (p. 502(g)-)。また書物の判形を示す *in 4°*. (78年版) を文字化して *in quarto* (85年版) にした例もある。数は多くないが、けっして希少ではない。またわたしの無学のせいかもしれないが、長い読書経験の中で以下の例にはお目にかかったことがないような気がする。78年版 *in 12* → 85年版 *in duodecim*. 数字(基数詞および序数詞)を文字化した例もある。78年版 [207] 32 (以下 38 まで) → 85年版 [168(d)-p. 169(g)] *trente-deuzième* (以下 *trente-huitième* まで)。
- (9) 綴りの修正 7) 78年版 *on* → 85年版 *l'on*. 数は多くない。78年版 [*iijr°, 同 296、同 450] → 85年版 [****2v°, 同 p. 239(d)、同 p. 364(g)] 参照。語調を整えるためのものであろう。
- (10) 綴りの修正 8) ローマン体であったものをイタリック体に改めたもの。稀なケースである。語の位相の違いを明確にするためと思われる。78年版 [274] *il demeura ou habita* → 85年版 [222(d)] *il demeura ou habita*
- (11) 綴りの修正 9) イタリック体であったものをローマン体に改めたもの。稀なケースである。80～81年版との対応でしか見当たらない。80年版 [271] *Comme si nous appellions d'Alcala ou Complate [...] la Vulgate des Theologiens de Louvain, les Editions corrigées* → 85年版 [241(d)-242(g)] *comme si nous appellions la Vulgata d'Alcala*

ou Complute [...] la Vulgate des Theologiens de Louvain, les Editions corrigées: このページはBNFの電子図書で欠ページである)

- (12) 綴りの修正 10) 以下は修正にあたるのかそうでないのか分からない。一か所だけ存在する。78年版〔508〕Ces plus grands Auteurs→85年版〔410(g)〕Ses plus grands Auteurs.
- (13) 句読法の修正 1) 上記 (3) 参照。また重文を (.) で区切ってふたつの短文にした例も各所に見られる。
- (14) 句読法の修正 2) ごくまれな例だが、78年版で疑問文が ([.] : ピリオド) で終わっているものを85年版で (? : 疑問符) に訂正した例があった。78年版〔392〕Peut-on trouver quelque sens dans cette traduction du Verset 4. du Pseaume 110. →85年版〔318(g)〕Peut-on trouver quelque sens dans cette traduction du Verset 4. du Pseaume 110 ?.78年版〔129〕Il se moque en même temps de la simplicité de ceux qui étoient dans cette pensée, & leur demande, comment il s'est pû faire que Nôtre Seigneur & les Apôtres ayent ôté des passages de l'écriture, pour les rendre conformes à la maniere que les Juifs les devoient falsifier. →85年版〔107(g)〕Il se moque en même tems de la simplicité de ceux qui étoient dans cette pensée, & leur demande, comment il s'est pû faire que Nostre Seigneur & les Apôtres ayent ôté des passages de l'écriture, pour les rendre conformes à la maniere que les Juifs les devoient falsifier? ただしこの修正は文章の勢いの結果であって、78年版が文法的には正しいように思える。
- (15) 句読法の修正 3) (, : カンマ) をつけて、78年版ではひとつの固有名詞と読める箇所を85年版では実は同格の解説であったことが判明した例がある。78年版〔514〕Lire Bourg situé →85年版〔424 (d)〕Lire, Bourg situé.

- (16) 句読法の修正 4) これは修正と呼ぶべきかどうか分からない。少なくとも論者には ([,] ; カンマ) がない方が解読しやすかったのだが……。78 年版 [488] de sorte que qu'on peut dire qu'il a eu aucun autre Pere ce qui peut contribuer à former un Interprete des Livres sacrés → 85 年版 [394(g)] de-sorte qu'on peut dire, qu'il a eu aucun autre Pere, ce qui peut contribuer à former un Interprete des Livres Sacrés
- (17) 句読法の修正 5) ([,] : カンマ) をつけて、78 年版よりも構文が取りやすくなった箇所が存在する。78 年版 [337] l'Interprete a traduit *fimbriatam frangée* → 85 年版 [273(g)] l'Interprete a traduit *fimbriatam, frangée*.
- (18) 語の配列の修正 1) これもごくまれな例だが、78 年版 [66] Livre quatrième が 85 年版 [55(g)] IV. Livre に修正されている。この修正も理由は分からない。
- (19) 語の配列の修正 2) 端的に言って、改行・段落変更である。78 年版では意味が通らなかつた段落変更が 85 年版では修正されている例がある。78 年版 [571] & ainsi// I/il sera → 85 年版 [459(d)] & ainsi il sera. 78 年版 [263] où le Verbe *Bara* ne signifie point absolument crea, Au verset → 85 年版 [215(d)] où le Verbe *Bara* ne signifie point absolument crea, //Au verset.
- (20) 語の配列の修正 3) 率直に言って、以下の文章を単文を重文に直したただけの問題で済まされるのかどうか、分からない。78 年版 [101] D'autre-part les Arabes assurent aussi que l'Arabe est avant toutes les autres Langues, & de plus les Cophtes, les Ethyopiens, les Armeniens, & quelques autres Nations disputant pour leurs Langues, même parmi ceux de l'Europe. Quelques Auteurs, & entre autres Grotius, ont

pretendu → 85 年 版 [84(g)] D'autre-part les Arabes assurent aussi que l'Arabe est avant toutes les autres Langues. Et de-plus les Cophtes, les Ethyopiens, les Armeniens, & quelques autres Nations disputant pour leurs Langues. Même parmi ceux de l'Europe, quelques Auteurs, & entre autres Grotius, ont prétendu

*

続いて誤記の訂正に入る。すでに上記、「誤記の訂正」欄でひとつだけ例をあげたが、以下に網羅的に訂正を拾ってみる。「網羅的」といったが数的にはけっして多いものではなく、78 年版刊行時におけるシモンの並々ならぬ学術的意欲を感じさせる。ページ指示は相変わらず 85 年版のリプリントである。なお「ページ」を略記する p. は省略した。

78 年版 → 85 年版における誤記・誤植の訂正：綴りの訂正

23(g) aptivité → captivité

35(d) reprendreen suite → reprendre en-suite

106(d) Origine → Origene

116(d) Basir → Bahir

216(d) Septante on traduit → Septant ont traduit

78 年版 → 85 年版における誤記・誤植の発生

***** 2 v° Chap. XI.(...)Qui en l'Auteur? → Chap. XI. (...) Qui en l'Auteur.

***** 4 r° dans son Livre → dan son Livre

38(d) ne voudrois poutant pas pousser → ne voudrois poutant pas

pousse

さらに続けて、聖書の引用箇所指示の訂正を羅列する（「羅列」といっても総数は多くないが）。

78年版→85年版

75(d) Verset16. → Verset 22.

129(d) ch.3. → Chap.5.

140(g) vers.20. → Vers.4.

213(d) Verset 5. → Verset 2.

214(g) verset 17. → verset 16.

223(d) Verset 20. → Verset 19.

224(g) Verset 8. → Verset 18.

251(d) Chapitre14. → Chapitre 4.

254(g) Chapitre 430. → Chapitre, 403.

262(g) Chap.1. → Chap.2.

318(g) Verset 10. → 20.

以上の誤記の他に、いわゆるハシラの誤記、ページのナンバリングの誤記もあるが、これは対照不可能であるので、ここには記さない。

*

さて修正箇所の指摘を終えたあとで、付加・削除を取りあげる。

78年版→85年版の付加

2(d): Pendant que la République des Hébreux a subsisté, il y a eu de tems en tems parmi eux de ces sortes de personnes inspirées de Dieu, soit pour écrire des Livres Divins & Prophetiques, comme l'a remarqué le même Joseph, ou, comme dit Eusebe, pour distinguer ceux qui étoient véritablement Prophetiques, d'avec d'autres qui ne l'étoient point. (この一節、78年版には完全になし)

78年版→85年版の削除

78年版 [89] → 85年版 96(g):Et en effet le même que S.Jerôme parlant du Livre de Judith → Et en effet, le même Saint Jerôme parlant du Livre de Judith (ちなみにBNF所蔵の78年版を読んだ炯眼な読者 [Steinmannによれば王立図書館の蔵書はアヴランシュ司教 Huet の蔵書だったらしい。Cf. Steinmann, 131. Huet について詳述するゆとりがないので、関心がある方は、*Gallia Christiana* か、その簡略縮小フランス語版である、Fisquet の *La France Pontificale* を参照されたい] は、誤りに気付いたのであろう、que にペンで横線が引かれている)

359(g):les Juifs Massorettes → les Massorettes

523(g):Les Juifs qui se servent des Paraphrases Caldaïques → Les Juifs se servent des Paraphrases Caldaïques (同様に qui にペンで横線が引かれている)

*

以上、付加と削除をあげてみたが、お気づきのように最大の付加を取りあげていない。ここで最大の付加というのは、①85年版巻末に掲載され

た、Lettre de Mons^R. De Veil, Docteur en Theologie, & Ministre du Saint Evangile, à Mons^R. Boyle, de la Societé Royale des Sciences à Londres, Pour prouver contre l'Auteur d'un Livre intitulé CRITIQUE DU VIEUX TESTAMENT, que la seule Ecriture est la regle de la Foi. およびその返書である、Lettre à Monsieur J*** S.D.R.、ならびに LETTRE A UN AMI, Où l'on rend compte d'un Livre, qui a pour titre, HISTOIRE CRITIQUE DU VIEUX TESTAMENT, *Piblié à Paris en 1678.* およびその返書である、RÉPONSE A LA LETTRE DE M^R. SPANHEIM, Ou LETTRE d'un Theologien de la Faculté de Paris, qui rend compte à un de ses Amis de HISTOIRE CRITIQUE DU VIEUX TESTAMENT, *Attribuée au Pere Simon de l'Oratoire,* ② 85 年版に付された少なからぬ脚註（補註）を指している。本稿は異本文の検討であるので、85 年版（さらには遡って 78 年版）の本質に迫るこれらの文章には触れないでおく。シモン研究者・愛好者ならこの 85 年版のリプリントはお手元にあると思われるので、そちらを参照していただきたい。ただ、②の脚註について論者が興味を覚えた⁵⁾ 箇所を二、三あげることをお許しいただきたい。

これらの脚註は《 》内でも例示したように、ほとんどが出典註ではなく、すべて補註と考えてよいだろう。『旧約聖書の批判的歴史』第一卷「モーセから当代にいたるまでの『聖書』のヘブライ語テキストについて」は、a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, v, x, y, z, aa, bb, cc, dd, ee, ff, gg, hh. の三十一の脚註（以下「第一卷」註 a をあらわす略号として I-a と表記するものとする。第二卷、第三卷についても同様）同第二卷「ここでは『聖書』の主要な翻訳について論じられる」は、a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, u, x, y, z, aa, bb, cc, dd, ee, ff, gg, hh, ii, kk, ll, mm. の三十五の脚註、同第三卷「ここでは『聖書』をうまく翻訳するやり方が論じられ、また同時にどれほど『聖書』があいまいなものであるか

が示される。またこれに加えて『聖書』について執筆した、ユダヤ人およびキリスト教徒のもっとも優れた著者たちについての批判が添えられる」は a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, m, n, o. の十四の脚註、さらに最初の補遺である「『聖書』の主要なエディションの一覧、およびこの問題をめぐっての様々な考察」は、前記第三巻の脚註指示記号のあとを継いだ形で、p, q, r, s. の四つの脚註をそれぞれ施されている。これらは指示内容に応じて、いくつかに分けられる。これらの脚註は補註としてそれぞれに興味深いものであり、本来ならひとつひとつ紹介すべきであろうが、紙幅が許さない（前もっていえば、これまでに触れていない質量ともに最大の異本文の列挙がのこされている）。ためにそれらの脚註を幾つかの類型に分けたうえで、書き出してみる。

1. 人名註：あまり世に知られておらず、しかしシモンの論述のうえでは欠かすことの出来ない人物についての簡単な註。ここでは第三巻からフランソワ・ヴァターブルとその名のもとに蒐集された、宗教改革派に有利な資料を含んでいる覚書について記述した補註に加え、これもほとんど世に知られていない神学者の紹介と逸話を引用するにとどめる。《*Son nom estoit Vatblé[sic], & tiroit sa naissance d'un village de Picardie situé dans le voisinage du país de Caux. A l'égard de Notes, voici ce que Robert Estienne en dit dans sa Préface aux Censures de Theologiens de Paris. Je recueillis avec grand labour, en veilles extrêmes, en diligences soigneuses & attentive, ce que les savans auditeurs de Vatable, jadis Professeur du Roi, homme tres-savant és Lettres Hebraïques, avoient retiré de ses Leçons, & l'assemblai en un Volume, ajoûtant la nouvelle Translation de la Bible vis-à-vis de l'ancienne*》〔442〕(III-g). 《*Le Docteur Gagney qui estoit de ce tems-là, savoit assez de Grec pour juger du*

Nouveau Testament de Robert Estienne, qui avoüe même qu'on chargea de cette revision deux Docteurs qui estoient savans en Grec. Peut-estre auroit-on de la peine à en trouver aujourd'hui de plus savans parmi ces sages Maistres. Ce qui ne s'accorde pas bien avec le jugement qu'Estienne leur attribüe, & qui estant rapport au Conseil du Roi, où cette affaire se jugeoit, on se mit à rire, dit le même Estienne, d'une façon estrange, & tous d'une voix dirent, quelle imprudence! quelle bestise! quelle temerité! Brief que leur ineptie ne se pouvoit plus suffrir» [329] (II-cc)

2. 事項を中心に本文を補足する註：古代カルデア語についての補足。および聖書のある版の校正過程とそれにかかわる逸話を紹介する補足註。

«*On pourroit aussi appeller cette Langue Ethiopique, Langue Arabe, pour la même raison, non seulement parce qu'elle a plusieurs mots Arabes, mais aussi parce qu'elle a plusieurs formaisons Arabes, & que les Ethiopiens semblent ester originaires de certains Arabes qui s'étendoient de ce côté-là*» [289] (II-t). «*Outre les Auteurs marqués, qui ont travaillé à la correction des Exemplaires Latins, il y a plusieurs Livres qui ont esté composés de tems en tems sous le titre de Correctorium, ou autre semblable. On a, ce me semble, trop negligé ces sortes d'Ouvrages, qui sont cependant d'une grande utilité pour la Critique de la Bible, comme on pourra le remarquer., en lisant les Notes de Lucas Brugensis: & l'on dit même que Robert Estienne en avoit un fort bon, sur lequel il a pris une bonne partie des corrections qu'il a ajoutées au marges de ses Bibles*» [263] (II-l)
3. 本文を説明的に補う註：アウグステイヌスの評価をめぐる補足。および本文で記された聖書の成立の一過程をめぐる説明と解説註。

«*Nous n'avons cependant point d'Auteur qui ait esté plus suivi que St. Augustin. Les Reformés le suivent comme leur premier Maistre après les Apostres, bien qu'il*

se soit éloigné assez souvent des autres Peres qui l'ont précédé» [400] (III-c) «*Mr. Huët & le Prelat dont nous avons déjà parlé, demeurent d'accord, qu'il s'est pû faire que les additions qu'on avoit mises à la marge des Livres de Moïse, ont esté en suite ajoutées dans le Texte: ce qui paroît d'autant plus vraisemblables, que cela est arrive à l'ancienne Version Grecque des Septante, & à la plus-part des Livres. Il sera aisé par cette voye, d'expliquer les redites ou repetitions dont le P. Simon parle en cet endroit, sans qu'il soit besoin d'avoir recours à ceux qu'il suppose avoit fait le Recueil des Livres Sacrés»* [32] (I-1)

4. 背景に論争がある註：好意的なカルヴァン評と（おそらく）ボシュエ評、一般論的な「聖書の難解さ」をめぐる説論とをあげる。「*Calvin savoit plus d'Hebreu & de Grec que l'Auteur de la Critique ne dit. Il avoit étudié les belles Lettres, & étoit fort poli. Ses Ouvrages soit en Latin, soit en François, sont écrits d'une maniere à faire croire, qu'il avoit du genie pour les Langues, & qu'il ne les avoit pas negligées dans sa jeunesse»* [345] (II-kk) ; «*Un Evêque de France, dans un Livre qu'il a composé depuis peu sur l'Histoire Universelle, est tres-éloigné de ce sentiment des Peres. Il croit que les additions qui sont dans les Livre de Moïse, y ont esté introduites long-tems avant Esdras, parce qu'elles sont dans le Pentateuque Samaritain. Je trouve mesme que le P. Simon en parlant du Pantateuque des Samaritains, insinüe cette pensée; & bien qu'il s'y arreste point, il semble qu'elle doit estre preferée à tout ce que les Peres & les Juifs ont dit là-dessus, puis que le même P. Simon témoigne n'ajouter gueres de foi à ce que les Juifs ont rapporté touchant cette grande Synagogue ou Assemblée, où l'on pretend que le Texte de la Bible a esté revû»* [4] (I-b) ; «*Quand les Protestans nient que l'Ecriture soit obscure, ils ne parlent pas generalement, mais seulement de ce que regarde la creance*

✧ les mœurs. Les Commentaires Critiques qu'ils ont faits sur la Bible, monstrent assez qu'ils sont convaincus de cette obscurité» [370] (III-a)

*

さて、以上が『旧約聖書の批判的歴史』本体の、78年版と85年版との異本文のあらましであるが、実は本稿の趣旨は本体以外の異本文にあり、これまではそこにいたる鳥羽口でしかなかった。本体以外の異本文とは、85年版の（あまり正確ではない）校閲版を出版したピエール・ジベールもそれとなく気づいていたようだが、「索引 [Table des Matières : 精確な表記については、以下の対照表を参照]」のものを指す。本稿の最終的な目的は、この「索引」の綿密な異本表であり、それを作成することが本稿の意義だと考えている。以下がその異本表である。ただし本来の「索引」の目的で使用するのではないため、「索引」が指示すべき（指示している）ページ・ナンバー（等）は略させていただいた。この「(等)」に含まれているのは、「同所」を示す [ibid]、およびページとページを繋ぐ [jusqu'à]、および参照ページを指示する場合の [Voyez (aussi)] である。ただし最後の指示詞に数字ではなく、項目名詞がついている場合は残した。ご理解を請う次第である。また78年版のTableの地はローマン体で強調ではイタリック、85年版の地はイタリック体で強調ではローマンを用いているが、以下の表では地をすべてローマン体に統一し、強調はゴシックを用いている。これはひとえに、表で8ポイントを用いた、視力の問題による。表作成者の無力を糺されればそれまでだが、読者の方々でお気になるようなら、原著を参照していただきたい。なおさきに述べたように、ジベールもこの「索引」の重要性には気が付いているが、その取りあげ方が必ずしも網羅的ではなく、恣意的な面が見られることと、78年

版との対照を怠ったことにはいささかの疑義がある。その疑義の結果が以下の対照表となっている、弁解じみるが、本稿作成中にワープロソフトの頑なな抵抗にあたり、見えない眼を酷使したため、誤記・遺漏も多いと思うが、お気づきの点をご教示いただきたい。この対照表に意義があるとなれば、そうしたご教示をもって改良した時点でのものであろう。

索引対照表

項目	78年版	85年版
	Table des Principales Matieres et des Tesmoignages des Auteurs.	Table des Matieres
Aaron Juif Caraïte.	Son commentaire sur le Pentateuque.	Son commentaire sur le Loi.
Aaron Hariscon.		Son Abregé de Grammaire imprimé à Constantinople, & ce qu'il y traite.
Aben Caspi.	R.Joseph Aben caspi. Sa Grammaire Hebraïque & son Dictionnaire.	この項目なし
Aben Esra.	Les Livres qu'il a écrits sur la Grammaire Hebraïque. Explication des différentes Manieres d'expliquer l'Ecriture parmi les Juifs, rapportées par Aben Esra.	Son sentiment sur l'invention des Points & des Accents du Texte Hebreu , & son usage. Ses Livres de Grammaire, sa méthode, & ce qu'il a crû du Texte Hebreu & de la Massore.Fait mention de cinq manieres d'interpreter l'Ecriture Sainte. Rejette les quatre premieres, & suit la derniere méthode, qui en-effet, est plus raisonnable, & doit être reçûë des Chretiens.
Aben Melec.	Sa maniere d'expliquer l'Ecriture.	Son livre intitulé Miclol Jophi.
Abraham.	Livre attribué au Patriarche Abraham.	Livre de la Création attribué à Abraham par les Docteurs Cabbalistiques.. A quelle occasion écrit.Est l'Ouvrage d'un imposteur.
R.Abraham Ben-Dior	ページ・ナンバーだけあり	Commentaire de cet Auteur sur le Livre de la Création

R.Abraham de Balmis.	Sa Grammaire Hebraïque.	Sa Grammaire imprimée à Venise
R.Abraham Seba.	Sa maniere d'expliquer l'Exriture.	Son Commentaire sur les cinq Livres de Moïse. Intitulé Tseor Hammor. Le tems auquel il vivoit.
Abraham Usque	ページ・ナンバーだけあり	ページ・ナンバーだけあり
Abravanel.	Don Isaac Abravanel ou Abarvenal ou Abarbinel. Sa maniere d'expliquer l'Ecriture.	Son sentiment sur les Auteurs des Livres de Josué, de Samuel, des Juges & des Rois. Est celui de tous les Rabbins, dont l'on puisse le plus profiter pour l'intelligence de l'Ecriture. Son stile & sa méthode dans ses Commentaires. Autres Ouvrages de ce Rabbin
Abregé	この項目なし	Abregés de la religion indépendamment de l'Ecriture de tout tems dans l'Eglise., & leur usage. Abregés qu'on a faits de toute la Bible, & leur utilité
Abulpharagius	ページ・ナンバーだけあり	Histoire Orientale de cet Auteur
Abusaid	この項目なし	Voyez Pentateuque.
Accents	Deux sortes d'Accents dans le Texte Hebreu. Leur antiquité.	Auteurs des Accents du Texte Hebreu leur usage, & leur différentes sortes. Où ont été mis principalement. irregularités qui s'y trouvent.
Acte	この項目なし	Voyez Authentique.
Actes des Apostres	この項目なし	Pour qui ont été écrits. Raison d'une diversité qui se trouve au Chap.7. entre le Texte Hebreu & la Version des Septante.
Adam	Livres attribuez à Adam. Si la Langue d'Adam a été perduë, Il n'est pas certain qu'Adam ait sceu parler dès qu'il a été créé.	Livre d'Adam. Comment il faut entendre que ses yeux furent ouverts après son peché.
Additions (aux Livres sacrez)	En quel sens il est dit dans l'Ecriture qu'on ajoutera ni ne diminuera à la parole de Dieu.	Additions dans les Livres de Moïse, selon Aben Esra. Exemples.
Adrian VI	ページ・ナンバーだけあり	この項目なし

Africanus	ページ・ナンバーだけあり	この項目なし
Allatius	Leo Allatius	この項目なし
Albigois	leurs Bibles	この項目なし
Alciat	ページ・ナンバーだけあり	この項目なし
Alcoran	この項目なし	A sa Massore. & à quelle fin inventée.
Aleander	Jerôme Aleander.	Lettre manuscrite de cet Auteur
Aleph	この項目なし	Cette lettre servoit autrefois de voyelle avant l'invention des Points: rendoit incertaine la maniere de traduire certains mots de l'écriture. Est quelquefois inutile dans de certains mots. Exemples.
Allegories	この項目なし	Allégories fort en usage parmi les Hebreu après le retour de la Captivité. Et du tems de Nôtre Seigneur. Philon & Joseph grands amateurs d'Allégories. Esprit des Juifs entierement porté à ces inventions. Quelques Auteurs Chrétiens ne leur font pas assez de justice là-dessus, en les tournant en ridicules. Trois raisons d'y recourir dans l'explication de l'écriture. Les Anabaptistes s'en sont servie pour établir leurs fausses maximes.
Alliance.	この項目なし	Livre de l'Alliance.
Alphabet	この項目なし	Alphabets des Massorettes.
Amama	Sixtimus Amama. Jugemens de son Livre intitulé Antibarbarus Biblicus	Il ne paroît aucun Jugement dans le Livre où cet Auteur attaque exprès l'ancien interprète Latine, & l'on s'en peut servir utilement contre lui-même, & contre les autres Protestans qui ont eu les même sentimens. Il n'a pas parlé plus judicieusement de la Version Grecque des Septante, & de quelques autres faits où il accuse de barbarie l'Eglise Latine.

Saint Ambroise.	Sa maniere d'expliquer l'écriture.	Sa méthode dans ce qu'il a écrit sur les six jours de la Création. Aimoit beaucoup plus les allégories, que le sens historique.
Amelote (Amelotte).	Les Pere Denis Amelote	Voyez, Nouveau Testament.
Amen	この項目なし	ページ・ナンバードけあり
André de Leon	この項目なし	Lettre manuscrite de ce Religieux.
Anges	En quel temps les noms des Anges ont commencé parmi les Juifs.	Noms des Anges quand ont été usage parmi les Juifs. D'où leur culte a pris son origine. Les Juifs condamnent le culte des Anges comme Intercesseurs. Leurs apparitions, dont il est parlé dans la Loi, ne doivent pour s'expliquer à la lettre, au sentiment de Maimonides. Avantage des Anges superieurs sur les Anges inferieurs dans la connoissance des choses, selon St. Thomas.
Anglicus	この項目なし	Commentaires de Thomas Anglicus sur la Bible.
Anglois	Les Versions de la Bible en Anglois.	この項目なし
Animaux	この項目なし	Il n'y a rien de plus incertain que ce qui regarde les noms des animaux dans l'écriture. Voyez Bochart.
Apex	この項目なし	Signification de ce mot dans St. Jérôme
Apocryphes (Apocryphe).	Des Livres de la Bible qu'on nomme Apocryphes.	Livres Apocryphes quand ont été recueillis. Pourquoi ainsi appellés. Reconnus pour divins par l'Eglise qui a succédé à la Synagogue. D'où une partie ont été pris. Sont cités par Joseph & par les Rabbins. Origene s'en sert pour rendre raison des differences qui se trouvent entre le Texte Hebreu & la Version des Septante.

Apoinarius.	Sa Version de la Bible.	Sa nouvelle Version de l'Ecriture. Blâmée par Saint Jerôme, et rejetée des Juifs & des Chrétiens.
Appeller du nom	この項目なし	Ce qui signifie cette façon de parler dans l'Ecriture.
Apôtres	Si les apôtres qui se sont servi de la Version Grecque des Septante l'ont renduë Infaillible. Pourquoi ils ont preferé cette Version au Texte Hebreu.	この項目なし
Aquila	Sa Version de la Bible	Tems auquel cet Auteur vivoit. Son apostasie de la Religion Chrétienne. Dessein de sa Version Grecque de l'Ecriture. Il la retoucha. Maniere dont il l'a faite. Louée en certaines rencontres par St. Jerôme, & rejetée en d'autres. Préférée par les Juifs à toutes les autres. Décriée par les Chrétiens. Les Peres n'en pouvoient juger sainement. Son Auteur ne toucha point au Texte Hebreu; & comment les Peres accusent les Juifs qui se servoient de sa Version, d'avoir corrompu l'Ecriture. Ces mêmes Peres y ont eu recours; quelquefois, aussi-bien que Saint Epiphane, quoi qu'ils eussent condamnée. Les deux Versions de cet Auteur ont été très-utiles à St. Jerôme. De quoi on le peut blâmer dans sa Version.

(この表、次稿に続く)

註

- 1) 「オラトリオ会の」と言うまでもないことを断ったのは、万が一にも、同時代、十七世紀の終わりに『聖書大辞典』を刊行した Honoré-Richard Simon と混同されることを危惧したからである。シモンに関心がある方なら必要あるまいとおもったが、念のため。

ここで専門家ならぬシモンに関心を寄せるだけの素人の論者が参考にした、主たる文献を挙げておく。『旧約聖書の批判的歴史』の原書については行論上本文、および以下の註で引くのでここではあとに託し、反復を避ける。それ以外のシモンの著作とシモンをめぐる論争書でいうと、まず『旧約聖書の批判的歴史』をめぐるシモンとルクレールの壮絶な論争については

[Jean Leclerc] *Sentimens de quelques Theologiens de Hollande sur L'Histoire critique du Vieux Testament, composée par Mr. Simon Prêtre, Oü, en remarquant les fautes de cet Auteur, on donne divers Principes utiles, pour l'intelligence de l'Ecriture Sainte*, Seconde Edition, revuë & corrigée, Pierre Mortier, MDCCXLI. mihi.

Richard Simon, *Reponse Au Livre intitule* [sic], *Sentimens de quelques Theologiens de Hollande sur l'Histoire Critique du Vieux Testament*, (1686), Kessinger Publishing, s.l.n.d. (このリプリント版は廉価だが扉が移されていないほか、リプリント版に関する情報が無い、テキストに用いるにははなはだ後味の悪いものであったが、致し方なかった)

[Jean Leclerc] *Défense des Sentimens de quelques Théologiens de Hollande sur L'Histoire critique du Vieux Testament, contre La Reponse du Prieur de Bulleville*, Henry Desbords, MDCLXXXVI. m.

Le Prieur de Bolleville [Richard Simon,] *De L'Inspiration des Livres Sacrés; Avec une Réponse au Livre intitule*, *Defense des Sentimens de queques Theologiens de Hollande sur l'Histoire Critique du Vieux Testament*, Rotterdam, MDCLXXXVII(Reprint, s.l.n.d.. (このリプリント版はテキストとしてはしっかりしているが、リプリントの発行元も発行年度も記されていない、不完全な刊本だが、致し方なく用いた)。わたしには『予言の成就』を執筆した Jurieu ともあれ、Leclerc を終始ジャーナリストにすぎないとする Henri Margival が描いているよりは〔223-240〕もっと奥深い論争であったように思える。

また次の論争書にも目をとおした。

[Richard Simon,] *Apologie pour l'Auteur de l'Histoire Critique du Vieux Testament contre les faussetés d'un Libelle publié par Michel le Vassor Prêtre de l'Oratoire*, Rotterdam MDCLXXXIX, (Univeränderler Nachdruck, 1973). 残念ながら論争相手の文献は未入手。

ポシュエには関心がないので、伊藤玄吾氏の論文を心待ちにしている。

『新約聖書の批判的歴史』 関連では、

Richard Simon, Prêtre, *Histoire Critique du Texte du Nouveau Testament, où l'on établit la Verité des Actes sur lesquels la Religion Chrétienne est fondée*, Reinier Leers, MDCLXXXIX./ m.

Richard Simon, Prêtre, *Histoire Critique des Versions du Nouveau Testament, où l'on fait connoître quel a été l'usage de la lecture des Livres Sacrés dans les principales Eglises du monde*, Reinier Leers, MDCXC. m.

Richard Simon, Prêtre, *Histoire Critique des Principaux Commentateurs du Nouveau Testament, depuis le commencement du Christianisme jusques à nôtre tems: avec une Dissertation critique sur les principaux Actes Manuscrits qui ont été citez dans les trois Parties de cet Ouvrage.* A Rotterdam, MDCXCIII (Univeränderler Nachdruck, 1969)

R.S.P. [Richard Simon, Prêtre,] *Nouvelles Observations sur le Textes et les Versions du Nouveau Testament*, MDCXCV . Paris (Univeränderler Nachdruck, 1973)

以上が原著およびその関連文献だが、研究書としては、

Auguste Bernus, *Richard Simon et son Histoire Critique du Vieux Testament, La critique Biblique au siècle de Louis XIV*, Slatkine Reprints, 1969 (1869).

Henri Margival, *Essai sur Richard Simon et La Critique Biblique au XVIIe siècle*, Slatkine Reprints, 1970 (1900).

Jean Steinmann, *Richard Simon et les origines de l'exégèse biblique*, Desclée de Brouwer, 1959.

Paul Auvray, *Richard Simon(1618-1712) Etude bio-bibliographique avec des textes inédits*, Paris, 1974

Pierre Gibert, *L'Invention critique de la Bible, XVe-XVIIIe siècle*, Gallimard, 2010.

Yves Krumenacker, Pierre Bayle et Richard Simon, in *Mémoire d'Ecriture*, Lassius, 2006, pp.172-196.

程度しかあげられない。好事家の仕事にかまけている暇はないと言われれば、そのとおりなので返す言葉もないが、好意的に素人愛好家の限界だのご容赦下さる方がいらっしゃれば、さいわいである。

- 2) *Histoire critique du Vieux Testament* 周知のとおり、BNF 所蔵の 78 年版にはタイトルページがない（他の刊本もそのようであるらしいが、わたしが確認したわけではないので、限定的な表現でお許し願いたい）。しかし以下に扱う 78 年版がこの文献の初版であることは間違いない。底とした BNF 所蔵の電子テキスト版とその問題については、本稿の本文を参照。
- 3) 1680 年刊行の海賊版については、手元の、Le R.P. Richard Simon, Prestre de la Congregation de l'Oratoire, *Histoire Critique du Vieux Testament*, Suivant la Copie, imprimée, A Paris, MDCLXXX. しか参照出来なかった。これが世に言われる 1680 年に刊行された三種類の海賊版のどれにあたるかは不明。論者の不徳の致すところである。1581 年刊行の海賊版のテキストには BNF 所蔵の Le P. Simon Prestre de l'Oratoire, *Histoire critique du Vieux Testament*, Amsterdam, MDCLXXXI. の電子テキストをコピーしたものをを用いた。
- 4) 伊藤玄吾、「リシャール・シモンとボシュエ(1)『旧約聖書の批判的歴史』の発禁処分に至るまで」、同志社大学言語文化学会編『言語文化』、2012 年、所収、pp. 313-351。日本ではじめてシモンを扱った論文として史的意義は大きい。ただ学術論文として、わざわざシモンやボシュエの生い立ちから述べる必要があっ

たのだろうか。伊藤氏がこの稿をもとにして悠然たる「大論文」にまとめたいならばそれでよいが、もう少し研究対象を絞って問題を論じられた方がよいのではないだろうか。パイフの専攻論文の鋭さを知っている論者としては、あまりに啓蒙的すぎる伊藤氏の筆致には歯がゆさを覚えなければならぬ。論者が学生だった遠い昔話をすれば、卒論を執筆するにあたって、執筆者と同程度の知識をもち、しかし論点では異論を有する読者を相手に説得するように書きなさい、と教えられたことがある。論者の経験がいまの論文執筆の基準にどう当て嵌まるのか分からない。しかし世界で初めての事実を発見した場合なら啓蒙的であるべきであろうが、伊藤氏もいうように、日本では既に、翻訳ながら、野沢協氏によってシモンの問題が言上げされている。これをばけ老人の世迷いごとととっていただいても一向に構わないが、論者としては語学的才能・学術的才能に有り余る（論者にその一部でもあったらもっとよい仕事ができたらうに、という妬心とともに）伊藤玄吾氏であるから、あえてお願いするのである。伊藤氏の啓蒙論文ならぬ専攻論文を期待する所以である。なお参考文献からの引用に関しては、前後関係からその著書・論文が自明である場合には、紙幅の都合から、後註をたてず、〔 〕内にページ・ナンバーを入れることをお許し願いたい。

- 5) 本稿の目的にはまったく添わないが、論者の関心をひいた個所を一か所、引用することをお許し願いたい。ことはルネサンス期の思想家ミシェル・ヴィラノヴァーヌスの同定に係る。「『聖書』の主要なエディションの一覧、およびこの問題をめぐっての様々な考察」の一説につきのような言葉がある。《Michel Servet, qui prenoit ordinairement le nom de Michaël Villanovane, la [= la Bible de Pagnin] fit imprimer de nouveau à Lyon in folio, en 1542. chez Hugue de la Porte, sous le titre de *Biblia Sacra ex Sanctis Pagnini tralatione, sed ad Hebraicæ Linguae amussim novissimè ita recognita & scoliis illustrata ut planè nova Edition videri possit.* Il y a au commencement une Préface de Michel Villanovanus, c'est-à-dire Michel Servet [...]》〔530(g)～(d)：下線部協調は論者〕。ミゲル・セルベト＝ヴィラノヴァーヌス説は十六世紀当時から根強かったが、ここでシモンが二度も強調しているのは興味深い。